

【旧約聖書日課】出エジプト記 24章12～18節

¹²主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける。」とモーセに言われると、¹³モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、¹⁴長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにとどまっていなさい。見よ、アロンとフルトがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

¹⁵モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。¹⁶主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。¹⁷主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。¹⁸モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章1～6節

¹こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。²かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。³わたしたちの福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。⁴この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。⁵わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。⁶「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章2～10節

²六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、³服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。⁴エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。⁵ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリ

ヤのためです。」⁶ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。⁷すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声が出た。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」⁸弟子たちは急いで刃りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

⁹一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。¹⁰彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

「神の山」へ登ろう！【こども説教のために】

キリスト教学校の紹介で来る新しい子どもたちを迎える季節になりました。新型コロナウイルスが流行してから、教会に出席することを積極的に勧めなくなっている学校も少なくないようです。それでも、キリスト教学校に通う子どもたちやそのご家族が、教会への出席を積極的に考えてくださるならば、うれしいことです。どんなことでも、強いられて義務感でするよりも、自発的に自分の意志で決めてくださるほうが、得るものが多いのです。

多くのキリスト教学校が、新たに入学してくる生徒に、こう教えるそうです、「皆さんは、自分でこの学校を選んで入学してきたと思うが、本当は、皆さんは神さまに選ばれてこの学校に入学することになったのです」と。

それは、教会が皆さんにいつも告げているのと同じことです。皆さんは、ご自分の意志で教会に来られているつもりかもしれない。けれども、本当は、皆さん一人ひとは神に選ばれて、今日の日覚めを与えられ、この教会へ、あの教会へと、招き集められてきたのです。神を礼拝するところに進み出るというのは、そういうことなのです。

旧約日課で、神に命じられてイスラエルの人々をエジプトから連れ出したモーセは、さらに神に命じられて、「神の山」と呼ばれる山に登りました。そこで神から教えを授けていただくためです。

福音書日課で、三人の弟子たちは、主イエスに連れられて高い山に登りました。そこで光り輝く姿の主イエスを見、また、天から響く神の御声を聴かせていただくためです。

教会は、モーセや主イエスの弟子たちが登った「山」のようなところです。招かれ、導かれて登って行ったとき、そこで、招いてくださったお方、導いてくださったお方の真のお姿に触れ、その御心に触れさせていただくのです。わたしたち自身が見たり聞いたりしたいと考えた者ではなく、わたしたちに姿を見せ、御声を聞かせたいとお考えのお方が、いらっしやるのです。

「高い山の上」で何を見たのか？

昨年の夏、教会の青年たちと高尾山に登る機会がありました。歩いて登るのではなくケーブルカーを使いましたから、「高尾山に行った」と言うべきかもしれません。それでも、展望スポットで、どこまでも続く東京の街並みを見下ろして感動したことには変わりありません。

飛行機に乗って雲の上を飛び、ロケットにのって大気圏の外を旅することさえできる時代になっても、多くの人が山に登ります。とは言え、山に登れば神に近づくことができる、と考えているわけではないでしょう。わたしたちも、たとえ高い山に登る機会があったとしても、そこで神に近づくことができたとは、考えないと思います。もちろん、神がお造りになられた被造物の偉大さに感動する、というようなことはあるでしょうが…。

旧約日課に登場するモーセは、神に命じられて登った山で、**教えと戒めを記した石の板**を神から授けられました。それは、「律法（トーラー）」と呼ばれるようになるものの、最初のもので、「律法」のまとめられた書物が、旧約聖書の土台になりました。

モーセが山の上で与えられた石の板がどのように造られたのかは、よく分かりません。初めは、神がご自身の指で石に文字を刻んでくださった、とも言われています（出エジプト 31:18）。けれども、次には、神に告げられた言葉をモーセが石に刻んだ、とも言われるのです（出 34:28）。いずれにしても、モーセは、山の上で神とお会いしているのでしょうけれども、そのお姿をはっきりと見るのではなく、ただその御声を聞いて神と認識していたようなのです。実は、モーセは、この場面よりずっと前にも、同じ山に、そのときは羊飼いとして羊を連れて、迷い込んだことがありました（出 3:1 以下）。そして、そのときも、燃え尽きない柴の炎の向こうから響く御声だけを聴いて、そこに神がいらっしゃると思われたと言われているのです。

三人の弟子たちが主イエスに連れられて高い山に登ったとき、弟子たちは、確かに主イエスが光り輝く姿に変わられたのを見たのでしょうか。そして、そこに旧約の「神の人」であるモーセと預言者エリヤが共に居る幻も見ました。けれども、そこで神を見ることはありませんでした。ただ、覆われた雲の中から響く御声を聞いて、自分たちが神の前にいるのだと認識したのです。

このとき、主イエスは、弟子たちに何を体験させようとお考えだったのでしょうか。神を直接見ることはなかったでしょう。主イエスがモーセやエリヤと共にいるところをお見せになろうとしたのでしょうか。モーセもエリヤも、神の山で神の御声を聞いた人々です。そのモーセやエリヤと共に主イエスがいるのは、そこが神の御声を聴く集まりだからでしょう。神の御声を聴く者たちの集まりをこそ、主イエスは弟子たちにお示しになられたのです。

高い山から見る世界を…

それは、山の上でなければならなかったのでしょうか。しかも、「高い山」の上でなければならなかったのでしょうか。

確かに、主イエスは、このとき弟子たちを連れて行く先として、「高い山」を選ばれたのです。もちろん、それは、「標高が高い山ほど、神に近づける」などとお考えだったからではないでしょう。単純に標高の高さで山を選ばれたのではないと思います。

むしろ、わたしたちが「高い山」にいると認識するのは、その山の上から見渡した眼下の風景によって、なのではないでしょうか。眼下に雲が漂い、どこまでも山脈が広がっていれば、確かに自分が「高い山」の一部にいると認識します。あるいは、はるか麓に広がる街並みが目に映れば、わたしたちは、たとえ標高がそれほどでないとしても、「高い山」に自分がいると認識するのではないのでしょうか。

主イエスが荒野で誘惑を受けられた逸話を、わたしたちは今年の受難節の最初に「マルコによる福音書」から聞きましたが、同じ逸話を伝える「マタイによる福音書」は、より詳しくそのことを伝えています(マタイ 4:1~10)。それによれば、主イエスは悪魔によって非常に高い山に連れて行かれ、そこで世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せられた、というのです。

主イエスが弟子たちを敢えて「高い山」に連れて行かれたのは、そこでどこまでも続く山並みの美しさを経験させるためではなかったでしょう。ご自身が悪魔によって連れて行かれたところの「高い山」に、弟子たちを連れて行こうとされたのです。そこで、ご自身が見せられたのと同じ、世のすべての国々とその繁栄ぶりを弟子たちに見させようとしたのでしょう。ただし、彼ら自身の目で見させるのではなく、あの人たちの目を通して見させたのです。モーセとエリヤです。それに加えて主イエスです。

その三人、神の御声を聴く者たちがこの世界を見ると、どのように見えるのか。それを、悪魔が誘惑したように、すべて自分の手に入れるべき対象として見るのか、それとは異なるものとして見るのか。神の御声を聞く者は、それをどのように見ようとしているのか、その視点を、その目線を、弟子たちに知ってもらいたいと、主イエスは願われたのではないのでしょうか。

わたしたちは、そのような主イエスのお連れくださる「高い山」に登る者として、教会に招かれてきたのです。ここで、わたしたちは主イエスの光り輝く姿を見ます。モーセやエリヤと共にいる主イエスの姿を見ます。神の御声を聴くこの人たち、このお方が、わたしたちの下りていく世界、わたしたちの日々の生活を送る世界を、どのように見ているのか。わたしたちがどのように見るべきなのか。今日も、わたしたちは教えられているのです。